

【論文】

# 大学生におけるアイデンティティの確立について

—心理的居場所との関係性から—

吉川 満典\*, 粟村 昭子\*\*

Relationship between Establishment of Identity among University Students and  
Psychological *Ibasho* (Shelters)

Mitsunori Yoshikawa and Akiko Awamura

## 要 旨

近年、居場所という言葉をよく耳にする。居場所という言葉が使われるようになったのは、不登校が社会問題化してきた1980年頃からである。当初、居場所は不登校の子どもたちの避難所といった意味で使われていた。しかし、最近では、「自己受容」「自己承認」「自己確認」の場としても使われている。また、青年心理学においても居場所は青年の「自己形成」の場として捉えられるようになってきている。そのため、本研究では、大学生の「アイデンティティ」の確立にどのように居場所が関係しているのかを検討することとした。

その結果、「受容される居場所」と「成長できる居場所」がアイデンティティの確立に関係していることがわかった。そのため、大学生には他者との親密な交流を持てる居場所が必要とされると考えられた。

## Abstract

The word *ibasho* (literally, shelter) is commonly known among the modern Japanese society. It came into existence in the 1980s, when chronic absenteeism among schoolchildren became a major social issue. At this time, *ibasho* was used as a shelter for children who refused to attend school. However, in recent years, it has become a place of “self-acceptance,” “self-recognition,” and “self-awareness.” In addition, in the field of adolescent psychology, the term *ibasho* has also become synonymous with places of “self-development” for young people. Thus, this research seeks to examine the relationship between *ibasho* and the identity formation among university students.

As a result, the research found that “*ibasho* that allows acceptance” and “*ibasho* that allows personal development” are related to the establishment of identity. Therefore, there is a need for the university students to have such a type of *ibasho* that will enable them to enjoy close social relationships with others.

受付日 2012.9.5 / 受理日 2012.10.24

\* 独立行政法人 国立病院機構 刀根山病院 神経内科 療育指導室 児童指導員 / \*\* 関西福祉科学大学 社会福祉学部 教授

● ● ○ **Key words** 大学生 university students / アイデンティティ identity / 心理的居場所 psychological *ibasho* / 親密さ intimacy

脚注 \* 本論文の一部は日本学校メンタルヘルス学会第14回大会(2011)で発表したものである。

## I. 問題と目的

近年、我が国では子どもを巡る様々な事件や出来事が起きており、社会問題として扱われることも頻繁にある。例えば、いじめや学級崩壊、引きこもり、家庭内暴力などがそれであるが、今日ではこれらの事件や出来事は日常的なものとなっている。

住田・南(2003)らによると、そうした事件や出来事を起こしてしまう子どもたちの生活や意識・態度には幾つかの共通点があるという。それは、対人関係の希薄性と不安定性とそれ故の共感性の欠如、また家族の情緒安定化機能の低下やそれに由来する愛情剥奪感および自己受容への渴望、思考・行動の幼稚性と自立的行動の欠如、否定的自己イメージの形成とそこからくる被害感・不安感の高進、生活体験不足とそれ故の現実的問題解決能力の欠如、地域社会関係の希薄化と孤立化などがあげられるという。そして、それらの子どもたちには、家庭においても、学校においても、さらには地域においても居場所がないという共通点が見て取れると指摘している<sup>1)</sup>。

ところで、子どもの問題に居場所という言葉が使用されるようになったのは、不登校が社会問題化してきた1980年頃からである。住田・南(2003)らによると、居場所という言葉は、当初は不登校の子どもたちの避難所や逃避場所といった意味合いで使われていたのであるが、今日においては、個人の「自己回復の場」「自己承認と自己確認の場」「自己安定化の場」といった意味合いで使われることが多くなったとしている。さらに居場所という言葉は、年月の経過とともにその意味合いを変え、より積極的な意味を持つ言葉として使われ始めているとし、現代人は関係性の中に「自己受容」「自己承認」「自己確認」を求めようとしているのではないかと結論づけている<sup>1)</sup>。

居場所の定義はその研究領域によっても様々ではあるが、物理的状況と心理的要因の双方から考察されるという点で共通している。例えば、精神分析の立場か

ら北山(1993)は、自分が自分であるための環境のことを居場所とし<sup>5)</sup>、また、青年心理学の立場から小沢(2003)は、居場所とは自分が生き生きと生きるために必要なものであり、私が私であることを確認し実感するためのものであるとしている<sup>4)</sup>。このように、居場所は単なる物理的な空間だけを指すのではなく、自分が自分であるためにといった個人の心理的要因をも含んで考察されることが多いといえる。

さらに都筑(1998)は、居場所を青年の自己形成の場として捉えているが<sup>12)</sup>、先に紹介した小沢(1998,2002,2003)<sup>2)3)4)</sup>や白井(1998)<sup>8)9)</sup>らによって、居場所とアイデンティティ形成や自己との関係が研究されてきた。前者は、アイデンティティ形成を実存的視点で捉えた一連の研究の中で、自分が自分であることの基準は一人の個人の中で幾つかあるが、それは相互に関係しており、そして、それに対応した幾つかの居場所がゲシュタルトをなしていることを指摘している<sup>2)3)4)</sup>。また、後者は、看護専門学校生への調査によって、受容される場が「自己受容」を高めること、成長できる場や安心できる場が「自己肯定」を高めること、そして、仲間といることや交流することが「セルフ・エスティーム」を高めることを示唆している<sup>9)</sup>。

次に、北山(1993)は、思春期・青年期における居場所の重要性をアイデンティティ理論に基づいて説明している<sup>5)</sup>。すなわち居場所とは、自分が自分であるための環境のことであり、本当の自分があるためには環境から自らの分としての居場所が与えられていることがその出発点となる。また、思春期や青年期などの移行期は自分の分裂を防ぐための自我の機能が問われやすい時期であり、それまでに鍛えられているはずの移行能力が問われるが、それに失敗すると「居場所がない」「自分がない」という困難が出現または露呈するとしている。そして、「自分がない」とはアイデンティティ論におけるアイデンティティ拡散の状態として理解することが有効な時もあるとしているが、このように居場所はアイデンティティ論との関係も述べられて

おり、また、アイデンティティ拡散の状態との関連も示唆されている。

このように居場所の研究はまだ新しく、わからないことも多い。本研究では、青年期の中でも特にアイデンティティの確立が発達課題となっている大学生のアイデンティティ形成にどのように居場所が関係しているのかを検討することを目的とする。さらに、理想としている居場所の特徴も検討することによって、居場所がないとする学生がどのような居場所を理想としているのかも明らかにしたい。それにより、大学生が過ごしやすいキャンパスづくりに何らかの示唆が与えられるものと考えられる。

## II. 方法

### 1. 調査対象者

大阪府下の四年制大学の学生に調査を求めた。回答が得られた296名のうち、もれなく回答した203名（男性59名、女性144名、平均年齢20.29歳、 $SD = 1.14$ ）のデータを分析対象とした。

### 2. 調査時期

2010年7月から9月に調査を行った。

### 3. 手続

大学の講義時間に無記名の調査用紙を配布し、その場で回収した。また、倫理的配慮として、調査の協力は任意であり回答を拒否できることを伝えた。

### 4. 調査内容

#### (1) アイデンティティ尺度

本尺度は、小此木（1978）が指摘した日本の大学生の新しいモラトリアム心理<sup>1)</sup>と今日の大学生のアイデンティティの確立度との関連性を検討するために下山（1992）が開発した心理尺度である<sup>6)7)</sup>。「アイデンティティの確立」と「アイデンティティの基礎」という2つの尺度から構成されている。「アイデンティティの確立」尺度は、自己の主体性や自己への信頼が形成されているかどうかを測定するためのものであり、「アイデンティティの基礎」尺度は、自己の安定が得られずに不安や孤独におそわれる気持ちを測定するもので

ある。尺度は20の質問項目から構成されている。回答は4件法で求め、各項目への回答に対して1～4点が与えられる。

#### (2) 居場所条件尺度

居場所の物理的状況と心理的要因を検討するために白井（1998）が開発した心理尺度であり、居場所の有無を尋ねた上で、居場所のあり方について、「現実（持っているもの）」と「理想（求めるもの）」の2つの側面から測定される<sup>8)9)</sup>。また、居場所は、「受容される居場所」「1人になれる居場所」「成長できる居場所」「安心できる居場所」の4つの因子に分類されている。なお、「受容される居場所」は、自分の本音を出せてありのままの自分が認められ、本気になってくれる人がいる居場所であり、「1人になれる居場所」は、ホッと一息つける居場所、「成長できる居場所」は、同じ目標を持ち、一緒に成長できる人がいる居場所、「安心できる居場所」は、心を癒してくれる人がいる居場所である。また、心理特性においては、「目標の有無」と居場所との関連が得られている。本尺度は22の質問項目から構成されている。回答は5件法で求め、各項目への回答に対して1～5点が与えられる。

## III. 結果と考察

### 1. 大学生が居場所としているところ

居場所が「ある」「どちらかといえばある」と回答した者（ $N=187$ ）を居場所のあるもの、居場所が「どちらかといえばない」「ない」と回答した者（ $N=16$ ）を居場所のないものとした。

居場所のあるものについては、それぞれが居場所としているところを尋ねた。その結果を Table 1 に示す。回答は、「友人」「家族」「自分の部屋」の順で多くなっているが、最も重要な居場所を尋ねたところ、「友人」と回答する割合は減少し、「家族」が増加した。これは、大学生が家族に対して感じている「親密さ」の強さがそのまま結果として表れたものといえるが、これによって、いまだ特定の重要な他者への親密さは成立されていないことも伺われた。

また、自由記述である、「9.自分の部屋以外で一人になれるところ」の回答には、「空き教室」「図書館」「公

園」「ゲームセンター」「繁華街」「布団の中」「PCの前」「ジョギング中」「お風呂」「カフェ」があり、「10.その他」の回答には、「ライブハウス」「バンド」があった。

Table 1  
居場所としてしているところ (N=187)

居場所条件尺度因子	居場所 (複数回答可)		最も重要な居場所 (1つだけ)	
	N	%	N	%
1 友人	143	76.4	30	16.0
2 家族	137	73.3	43	23.0
3 自分の家	124	66.3	20	10.7
4 家(家族と自分の部屋以外)	62	33.2	3	1.6
5 学校	62	33.1	1	0.5
6 クラブ・サークルなどの団体	49	26.2	5	2.7
7 恋人	44	23.5	11	5.9
8 バイト先	32	17.1	1	0.5
9 自分の部屋以外で1人になれるところ	11	5.8	1	0.5
10 その他	3	1.6	1	0.5
11 無回答	-	-	71	38.1

## 2. 理想とする居場所の差と現実の居場所について

居場所のあるものと居場所のないものの「理想とする居場所」の得点に差があるかどうかを検討した。その結果を Table 2 に示す。また、居場所のあるものが評価した「現実の居場所」の得点を Table 3 に示した。

Table 2  
理想とする居場所の得点の比較

居場所条件尺度因子	居場所のあるもの (N=187)		居場所のないもの (N=16)		df	t 値
	平均値	SD	平均値	SD		
受容される居場所	4.02	.57	3.58	.78	201	2.92
1人になれる居場所	3.19	.84	3.84	.76	201	-3.01
成長できる居場所	4.04	.74	3.38	.91	201	3.40
安心できる居場所	3.20	.73	3.28	.60	201	-0.42

\*\*\*p < .001, \*\*p < .01, \*p < .05

Table 3  
現実の居場所の得点

居場所条件尺度因子	居場所のあるもの (N=187)	
	平均値	SD
受容される居場所	3.62	.57
1人になれる居場所	3.13	.85
成長できる居場所	3.65	.72
安心できる居場所	3.07	.65

まず、Table 2 でわかるように、居場所のあるものは居場所のないもの比べて「受容される居場所」および「成長できる居場所」の平均得点がそれぞれ有意に高くなっており、より強く理想の居場所と考えていることがわかった。言い換えれば、居場所のあるものはないものに比べて「受容される居場所」、特に「成長できる居場所」をより理想の居場所とみなして強く求めていることが考えられる。実際に Table 3 からわかるように「受容される居場所」と「成長できる居場所」は他の居場所よりも高い得点になっていることがわかる。

また、逆に居場所のないものはあるものよりも、「1人になれる居場所」に対して有意に高い平均点を与えており、他者から孤立した居場所を理想として求めていることがわかった。しかし、居場所のないものは実際には居場所が「どちらかといえない」「ない」と答えたものであり、一人になれる居場所すら見つけていないことになる。

繰り返しになるが、以上のことから、居場所のあるものはより他者との親密な交流を居場所に求めており、「受容される居場所」のようなありのままの自分が他者に認められる場や「成長できる居場所」といった一緒に成長できる人がいる場を求めており、実際にもそのような居場所をもっていることが明らかとなった。また、居場所のないものは「1人になれる居場所」といった他者との交流を回避できるような居場所をより求めていることが明らかとなった。「1人になれる居場所」には、ホッと一息つける居場所といった休息場所としての意味合いも含まれているが、居場所が「どちらかといえない」「ない」と回答した者においては、他者との交流を回避できるような居場所としての意味合いが強いものと考えられた。

ところで、居場所のあるものは、住田・南 (2003) らが述べているように<sup>11)</sup>、居場所に「自己回復の場」「自己承認と自己確認の場」「自己安定化の場」といった積極的な意味合いを付与しているといえそうであるが、居場所のないものにおいては、かねてから不登校の子どもたちの「避難所」や「逃避場所」として使用されてきた消極的な意味合いでの居場所がそのまま当てはまりそうである。そのことから、居場所のないものは「不登校」の子どもたちの心理状態にも類似するところがあるのではないかと考えられた。また、住

田・南 (2003) らが述べるように<sup>11)</sup>, 「いじめ」「学級崩壊」「引きこもり」「家庭内暴力」を起こす子どもたちの共通点として, 「居場所がない」ことが挙げられていることから, 居場所のないものはそれらの子どもたちの心理状態にも類似しているところがあるのではないかと考えられた。そして, 北山 (1993) が述べている<sup>5)</sup>「居場所がない」「自分がいない」といった「アイデンティティ拡散」の状態にも同様のことがいえるのではないかと考えられた。

このことから, 居場所のあるものの「アイデンティティの確立」尺度に関係している要因を分析することで, 今日の大学生がアイデンティティを確立していく上で必要とされる居場所の特徴を明らかにすることができるのではないかと考えられた。

### 3. アイデンティティの各尺度得点の比較と居場所の有無について

アイデンティティ尺度の得点に差があるかどうかを調べた。結果は Table 4 に示す。平均得点の差を  $t$  検定によって比較検討したところ, 居場所のあるものの「アイデンティティの確立」尺度の平均得点は 2.68 ( $SD=0.49$ ), 居場所のないものの平均得点は 2.07 ( $SD=0.44$ ) であり, 有意差 ( $t=-4.84, df=201, p<.001$ ) がみられた。また, 居場所のあるものの「アイデンティティの基礎」尺度の平均得点は 2.18 ( $SD=0.50$ ), 居場所のないものの平均得点は 1.69 ( $SD=0.47$ ) であり, こちらも有意差 ( $t=-3.81, df=201, p<.001$ ) がみられた。

Table 4  
居場所の有無とアイデンティティの各尺度得点の比較

アイデンティティ尺度因子	居場所のあるもの ( $N=187$ )		居場所のないもの ( $N=16$ )		$df$	$t$ 値
	平均値	$SD$	平均値	$SD$		
アイデンティティの確立	2.68	0.49	2.07	0.44	201	-4.84
アイデンティティの基礎	2.18	0.50	1.69	0.47	201	-3.81

\*\*\* $p<.001$ , \*\* $p<.01$ , \* $p<.05$

従って居場所のあるものは居場所のないものに比べて, よりアイデンティティが確立されており, アイデンティティの基礎である気持ちも有していることが明らかに示された。

### 4. アイデンティティ尺度に関係する要因について

居場所は, アイデンティティ尺度に関係していることがわかった。居場所のあるものが実際にもっている居場所の特徴がアイデンティティ尺度と関係させている要因となっていることも予想されたので, 居場所のあるものの「アイデンティティの確立」尺度と「アイデンティティの基礎」尺度に関係している要因を分析するために重回帰分析による偏回帰係数の検定を行った。なお, 居場所は「現実の居場所」得点を分析対象とした。

その結果, 「アイデンティティの確立」尺度においては, 決定係数は 0.16 であり, 「受容される居場所」の係数は 0.20 で  $t$  は 2.82 で有意であり, 「成長できる居場所」の係数は 0.28 で  $t$  は 2.05 で有意であった。また, 「アイデンティティの基礎」尺度においては, 決定係数は 0.17 であり, 「1 人になれる居場所」の係数は  $-0.34$  で  $t$  は  $-3.07$  で有意であり, 「受容される居場所」の係数は 0.16 で  $t$  は 2.29 で有意であった。

以上のことから, 「受容される居場所」や「成長できる居場所」は「アイデンティティの確立」尺度に関係する重要な要因であることが示唆された。また, 「1 人になれる居場所」は「アイデンティティの基礎」尺度に負の関係をする要因であり, 「受容される居場所」は正の関係をする要因であることがわかった。従って, 「受容される居場所」や「成長できる居場所」といった他者との親密な交流のある居場所を持つことはアイデンティティをより確立させるということを明らかにすることができたといえる。また, アイデンティティの基礎となる気持ちは 1 人であっては高まらず, 他者から受容されていることが必要であることも明らかとなった。

白井 (1998) は, 「自己受容」は受容される場において高まること, 「自己肯定」は成長できる場や安心できる場において高まることを明らかにした<sup>9)</sup>。本研究では「アイデンティティの確立度」は, 「受容される居場所」や「成長できる居場所」において高まることが明らかとなった。また, 「アイデンティティの基礎」となる気持ちは, 「受容される居場所」において高まることも明らかとなった。なお, 心を癒してくれる人がいる居場所である「安心できる居場所」については, 本研究では有意差は見られなかった。これは白井の研究が看護専門学校の学生を対象としており, 彼女らは

国家資格を取得するために実習を含めかなりのストレスのかかる状況にいることが予測されることから、束の間の安心を求める傾向にあったのかもしれない。いずれにせよ、大学生のアイデンティティの確立とは異なる結果が出たことから今後検討していくことが必要であると考えられる。

以上のことから、アイデンティティを確立するために、「受容される居場所」のような自分の本音を出して、ありのままの自分が認められ、本気になってくれる人がある居場所や「成長できる居場所」のような同じ目標を持ち、一緒に成長できる人がある居場所がより強く求められていることが示唆された。これは先に紹介した小沢（2003）が主張しているとおりの<sup>4)</sup>、個人の中には幾つかの居場所がゲシュタルトをなしているという見解と一致するものでもある。また、アイデンティティの基礎となる気持ちを高めるためには、「受容される居場所」が求められることも示唆された。

#### IV. 総合考察

本研究の目的は大学生のアイデンティティの確立にどのように居場所が関係しているのかを検討することであった。また、それに加えて、大学生が理想としている居場所の特徴を検討することによって、居場所がないとする大学生がどのような居場所を理想としているのかを明らかにし、それにより、学生たちへの「居場所づくり」の必要性という観点から何らかの示唆を与えようとするものであった。

本研究の結果からは、居場所のあるものは居場所のないものと比べて有意にアイデンティティを確立していることが示唆された。また、居場所のあるものは「受容される居場所」や「成長できる居場所」といった他者との親密な交流のある居場所を有意に理想としており、現実にもそれらの居場所を有していることが示唆された。さらに、居場所のないものは「1人になれる居場所」といった他者との交流を回避することができるような居場所を有意に理想としていることが示唆された。また、アイデンティティの基礎となる気持ちは他者から受容されることによって高まることも示唆された。

以上のように、「受容される居場所」のような自分

の本音を出して、ありのままの自分が認められ、本気になってくれる人がある居場所や「成長できる居場所」のような同じ目標を持ち、一緒に成長できる人がある居場所が大学生のアイデンティティをより確立させている要因の一つとなっていることが明らかとなった。このことは、大学生がアイデンティティを確立させるためには、「受容される居場所」や「成長できる居場所」といった他者との親密な交流のある居場所を有することが望ましいということである。したがって、大学生には「受容される居場所」や「成長できる居場所」といった他者との親密な交流のある居場所を提供していくことが、彼らの発達課題を達成していく上でも必要であるということができよう。とくに「受容される居場所」はアイデンティティの基礎となる気持ちを高めるため、より早期からの提供が望まれる。

また、本研究においては、心を癒してくれる人がある居場所である「安心できる居場所」については有意差が見られなかったが、これは4年制大学の2回生の学生中心の調査になったことと関係しているかもしれない。大学に既にある程度なじんでいるうえに、まだ就職活動などストレスのかかる状況があまりない学年であるのでこのような結果が出たと考えられるが、大学生の他の学年でのより詳しい調査が必要であると思われる。

また、成人期初期には他者との間に真の愛情関係を築けるように成長していくという「親密さ」の成立が求められると鈴木（2003）は説明しているが<sup>10)</sup>、「受容される居場所」や「成長できる居場所」といった他者との親密な交流のある居場所をもっている大学生のほうがその発達課題の達成にもより近い位置にあるのではないかと考えられた。また、「親密さ」の成立と対を為す概念として、親密な人間関係が築けず、形式的な人間関係の中で孤立の感覚を強めていくという「孤立」があると鈴木（2003）は説明しているが<sup>10)</sup>、居場所を持たず、また、「1人になれる居場所」のような他者との交流を回避できる居場所を理想としている大学生においては、「孤立」に近い状態にあることも考えられた。

以上のことから、大学生が「受容される居場所」や「成長できる居場所」といった他者との間に親密な交流のある居場所をもっていることは、成人初期の発達課題を達成していく上でも重要であり、また、居場所

がないことが将来の「孤立」にもつながりうるということが伺われた。しかしながら、それを明らかにしていくためには今後の調査研究が必要ではあるが、青年期または成人初期の男性及び女性の「対人関係」の持ち方を調査研究することによって、「親密さ」の成立と「孤立」についての何らかの知見が得られるのではないかと考えられた。本研究においては、心理的居場所は成人初期の発達課題の達成にも関係しているものと考えられるということではできた。

また、本研究のもう一つの目的は、大学生が求めている居場所の特徴を検討することによって、居場所がないとする大学生がどのような居場所を理想としているのかを明らかにし、それにより、学生たちへの「居場所づくり」という観点から何らかの示唆を与えるというものであった。

上述のとおり、今日の多くの大学生が理想とする居場所は「受容される居場所」や「成長できる居場所」といった他者との間に親密な交流のある居場所であった。また、それらの居場所は、彼らのアイデンティティの確立度にも関係しているものであった。その一方で、若干名ながらも存在した居場所がないとする大学生が理想とする居場所は「1人になれる居場所」であることが明らかとなった。「1人になれる居場所」には、ホッと一息つける居場所といった休息場所としての意味合いも含まれているが、居場所がないとする大学生においては、他者との交流を回避できるような居場所としての使用のされ方が強いものと考えられた。

住田・南(2003)らが述べるように、「いじめ」や「学級崩壊」「引きこもり」「家庭内暴力」などを起こす子どもたちには「居場所がない」という共通点がある<sup>11)</sup>。また、居場所という言葉が使用されるきっかけとなった「不登校」の子どもたちについても同様のことがいえる。そのため、居場所がないとした大学生は、過去に「引きこもり」や「不登校」であった経験を持っている可能性もあり、自らの手で居場所をつくることには困難を呈することが考えられた。そのため、居場所がないとした大学生は何らかのサポートを必要としている対象者として扱うこともできるかもしれない。この問題の根幹には、「居場所がない」ことによってその「人間的成長」が阻害されてきたところにあることが推測されるので、彼らのサポートにあっては、大学が対人関係から避難できる居場所や親密な対人関係

を持てる居場所などさまざまな居場所を提供していくことも不適応学生のサポートとして有効であるかもしれない。しかし重要なことは、単なる「場」の提供に終わらずに、彼らの「人間的成長」を助けるためのサポートとして行うことであり、そのようなシステムが必要なのかもしれないと考えられた。

## 引用・参考文献

- 1) 小此木啓吾『モラトリアム人間の時代』中央公論社、1978年
- 2) 小沢一仁「青年の居場所から見たアイデンティティ」『日本青年心理学会大会発表論文集』6、1998年、32-33頁。
- 3) 小沢一仁「居場所とアイデンティティを現象学的アプローチによって捉える試み」『東京工芸大学工学部紀要』25、2002年、30-40頁。
- 4) 小沢一仁「居場所を得ることから自らのアイデンティティをもつこと」『東京工芸大学工学部紀要』26、2003年、64-75頁。
- 5) 北山 修『北山修著作集 日本語臨床の深層 第3巻 自分と居場所』岩崎学術出版社、1993年
- 6) 下山晴彦「大学生の職業未決定の研究」『教育心理学研究』34、1986年、20-30頁。
- 7) 下山晴彦「大学生のモラトリアムの下位分類の研究—アイデンティティの発達との関連で—」『教育心理学研究』40、1992年、121-129頁。
- 8) 白井利明「学生は居場所をどうとらえているか—自己受容とセルフ・エスティームとの関連—」『日本青年心理学会大会発表論文集』6、1998年、34-35頁。
- 9) 白井利明「若もの・心もよう⑩ 若者に居場所はあるのか」『大学進学研究』108、1998年、54-59頁。
- 10) 鈴木乙史「人間のライフサイクル」梅本堯夫・大山 正(監)『新心理学ライブラリ9 性格心理学への招待[改訂版]』サイエンス社、2003年、96-109頁。
- 11) 住田正樹・南 博文「はしがき」住田正樹・南 博文(編)『子どもたちの居場所と対人的世界の現在』九州大学出版会、2003年、1-5頁。
- 12) 都筑 学「青年心理学から見た居場所の問題」『日本青年心理学会大会発表論文集』6、1998年、30-31頁。